

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

***43号まで、48軒あった東京天文台官舎**

東京天文台には観測者用の官舎をはじめ事務官なども入った官舎が43号までであった。しかし、3号は高等官官舎で1号と同じ大きさがあつたが、真ん中で切り離し、曳家で独立した2軒の官舎として3号甲、3号乙になっており、8号、9号、10号は2軒長屋で、それぞれ甲・乙で2軒あつた。また、遅くには官舎1号も真ん中で仕切られ101号、102号として使われた。したがって一番多いときは48軒の官舎があつた。1号を台長官舎と思っている人がいたが、台長官舎は14号であつた。図1が1968年ころ50年ほど前の東京天文台建物配置図である。官舎はいつの頃か東京天文台宿舎と呼ばれた。

東京天文台（三密）建物配置図

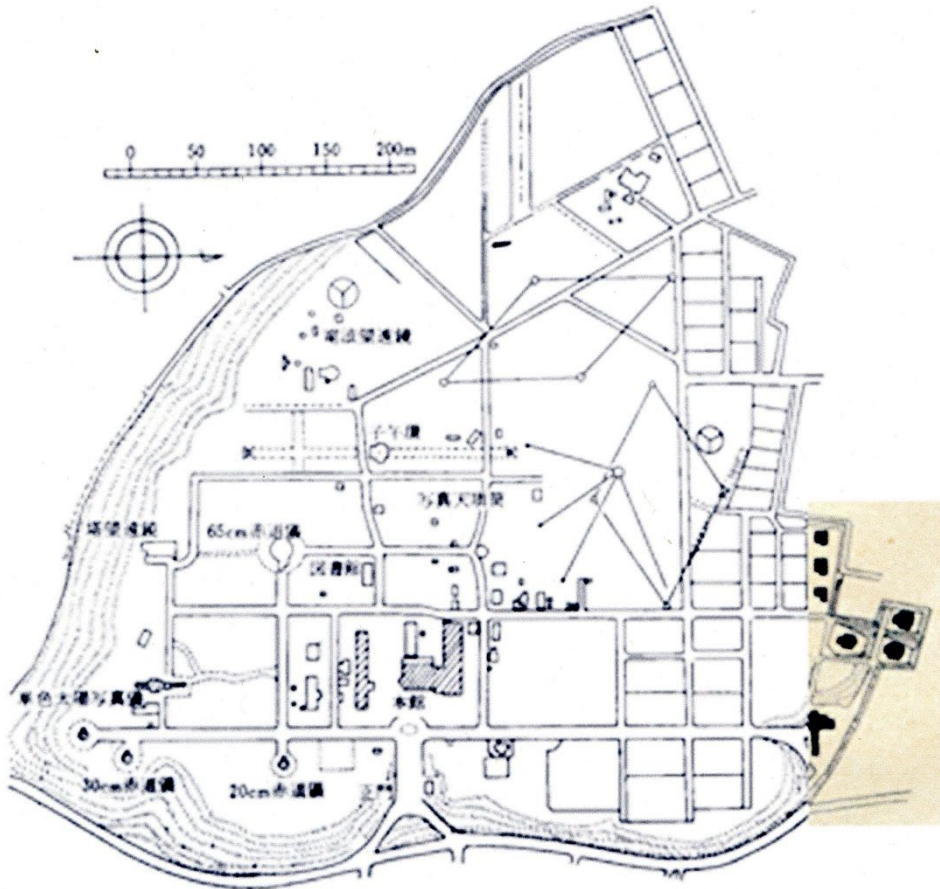


図1 1968年ころの東京天文台建物配置図

図1は東京天文台90年誌にあった図に東京天文台75年誌にあった図(図2)の一部を加えて作成したものである。東京天文台75年誌の官舎の配置は37号~43号の位置が正確でない。

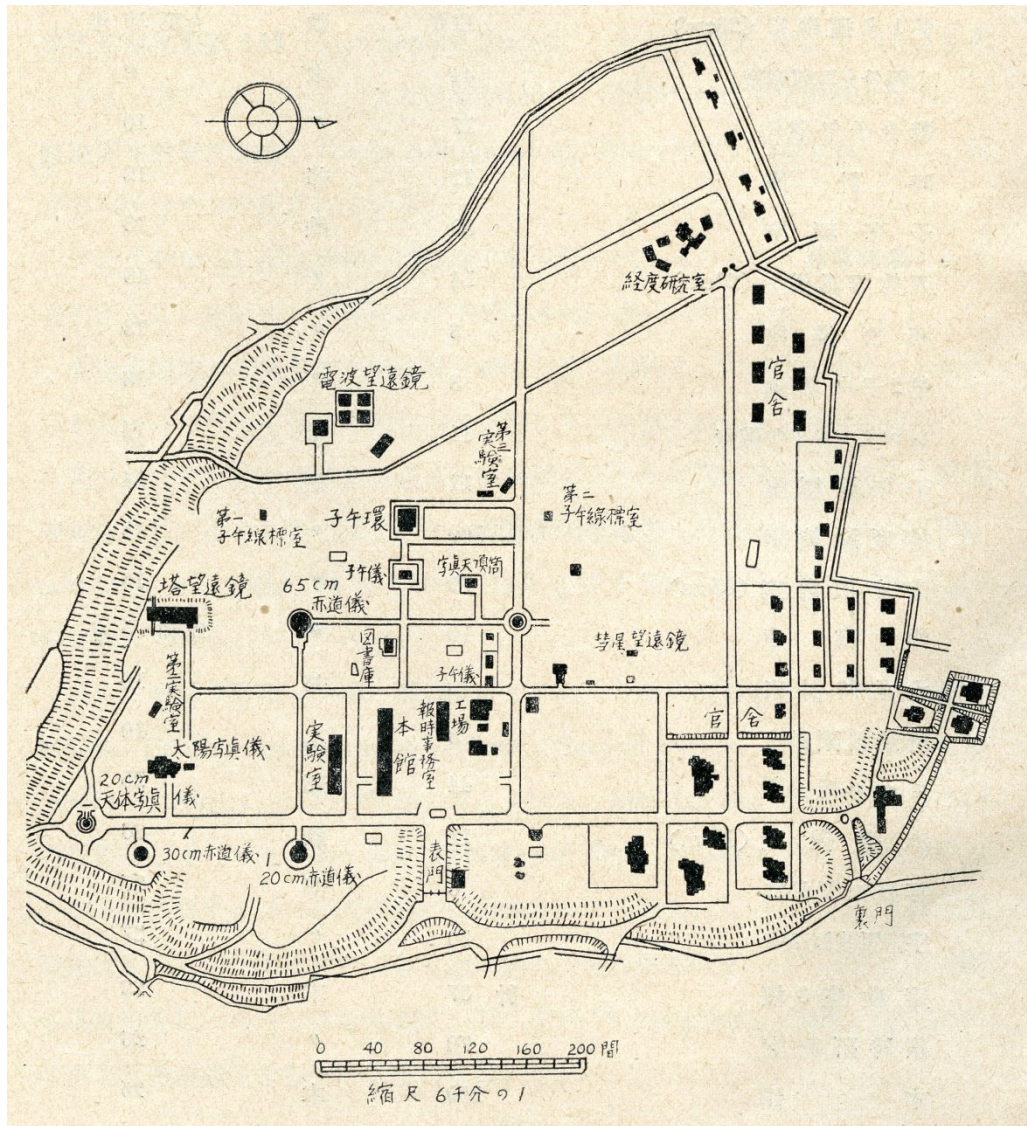


図2 1953年ころの建物配置図

施設課の作成する国立天文台の建物配置図も官舎の配置は正確な図が描かれないので官舎の配置がどうなっていたかを記録にとどめておきたい。東京天文台90年誌の建物配置図の官舎の配置はほぼ正確だが、8、9、10号官舎の位置が図にない。40号から43号は、40号と41号の間、42号と43号の間は空き地になっていた(図3)。

また、官舎以外の職員の住宅が2軒あった時代があり、東京天文台構内には一時50軒の住居があった。さらに裏門を入った右側に合宿と呼ばれた独身寮があった。この独身寮は国立天文台に改組された際、東京大学の独身寮であったため、東京大学に残され、しばらくは東京大学独身寮として使われたが、その敷地は東京大学により売却され、建売住宅が

10 軒ほど立てられ、独身寮の面影はない。

この官舎すべてが写った東京天文台の航空写真がある（写真1）。この写真には官舎ではなかった住居 2 軒も写っている。この写真には 30 cm 望遠鏡ドームも映っているから 1951 年以降の航空写真である。



写真1 天文台構内に畑地も残るころの航空写真

写真 1 を見ると、桜並木の桜の木はまだ小さな若木に見える。また、菱形基線の基線尺試験室の長い建物も写っている。観測施設と官舎の間の広い領域には畑が広がっている。65 cm ドームの北、少し西には硬式テニスコート、卯酉儀ドームの北、少し東には軟式テニ

スコート、北西にはバレーボールコートが確認できる。

官舎の敷地だけをトリミングしたものが写真2である。



写真2 敷地の官舎部分

官舎の番号を記入したものが図3である。建設時、移管順に番号がついているので複雑である。

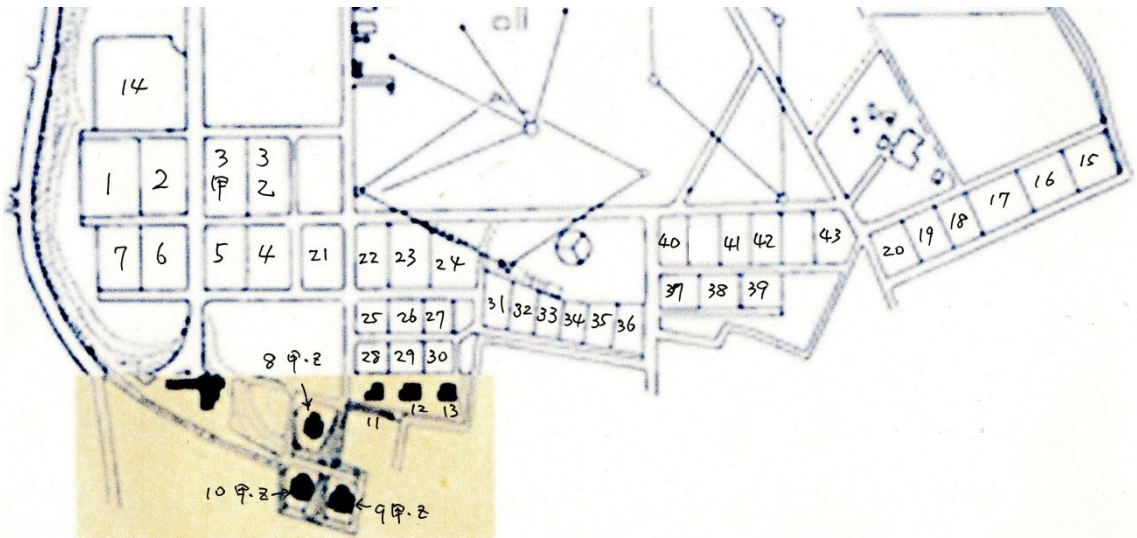


図3 東京天文台の北側境界線近くに官舎が東西に建てられていた

なお、15号官舎～20号官舎は1948年に東京天文台に移管された三鷹国際報時所の官舎であり、17号が所長官舎であった。昔は高等官官舎には書生部屋、女中部屋もあり、判任官官舎、雇人官舎など階級によって住める官舎に制限があった。21号～43号官舎は1950年ころ建設された戦後物の不自由な時代の建物で非常に粗末な建物であった。

東京天文台本館は1945年2月8日未明、火災を起こし全焼し貴重な機材、資料が焼失してしまった。その後、研究棟は本館（一）1949年建設、本館（二）1950年建設、など木造

の建物がいくつも建てられたが、観測施設の近くに木造で建てられた研究室が広い範囲に点在していた。

事務部は台長官舎であった 14 号官舎を事務棟として使用し、台長室、応接室も 14 号官舎にあった。

そして事務部の管理棟、北研究棟が完成したのは 1966 年（昭和 41 年）のことであった。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp